戦旗

1960年11月22日発行
発行所
新宿区東大久保二の一五五
世界労働運動研究所
TEL (341) 8481
編集 発行人 鏑木 潔
一部 拾円

万国の労仂者団結せよ！
革命的前衛・共産主義者同盟を
すべての工場に組織せよ！

共産主義者同盟

「戦旗」固定購読
お申込みは
新宿区東大久保二の一五五
世界労働運動研究所内
戦旗経営局
振替番号東京一二一〇四番
定価 一部 十円
月四〇円 半年 二四〇円
送料五円 年分 二四〇円 送料三十円

階級闘争をすてる総評

国際自由労連の来日と社党の新方針

安保闘争、三池闘争の中ではつきりと暴露された労働運動指導部一味に総評民同派幹部に対して、このさいの中で生れて来た多くの若い、新らしい力は、鋭い批判の目をむけて、独自の歩みをはじめつつある。この内容と方向は、われわれにとって最も注目すべきものであるが、現実の労働運動は、依然として旧来の民同の手に握られ動いていることを片時も忘れてはならない。安保、三池の大斗争の敗北と、日本資本主義の新らしい拡大の中で、彼等は自らの支配下にある労働運動をこれに見合つたものにするために大きく動きをしている。今後の斗いに致命的な影響を回るすであろうこの動きを正しくとらえねばならぬ。

（一）

五月、太田醒長、岩井事務局長が連名で発表した「諏訪談話」は、総選挙に当り下部組合、地評などでかなり拡がつた「社共両党支持」をかかげる共産党に対する正面からの攻撃であつた。新らしい活動家が、官僚化してどうしようもない民同から離れ共産党にとられていくのを、相変らず「大会決定遵反だ」とおどすやり方は、民同の本性を見せているが、総評の新しい動きは、これだけにとどまらない。

十四日、社会党江田書記長の「総選挙後の労働運動に対する要請」は太田醒長らとうち合せのうえ発表したもので、ここでの主要点は労働運動は資本の攻撃をうけて立つ姿勢から、日本の経済発展をみずから担つていく建設的計画を示す積極的な運動に変るべきで「政策転換」を中心にすること、そのためには組合が自分の賃金や労働条件の要求獲得のみでなく国民的福祉に立つた広い運動に発展させねばならない。その運動は全労を合してやつて行きたいというものである。

これはさきに発表された社会党の新政策を労働運動の分野に示したもので、イタリア共産党の構造的改良の思想を採用し、これまでの労働運動に対する裏書！」は、総選挙に当り下部組合、地評などでかなり拡がつた「社共両党支持」をかかげる共産党に対する正面からの攻撃であつた。新らしい活動家が、官僚化してどうしようもない民同から離れ共産党にとられていくのを、相変らず「大会決定遵反だ」とおどすやり方は、民同の本性を見せているが、総評の新しい動きは、これだけにとどまらない。

（二）

十四日、社会党江田書記長の「総選挙後の労働運動に対する要請」は、総選挙に当り下部組合、地評などでかなり拡がつた「社共両党支持」をかかげる共産党に対する正面からの攻撃であつた。新らしい活動家が、官僚化してどうしようもない民同から離れ共産党にとられていくのを、相変らず「大会決定遵反だ」とおどすやり方は、民同の本性を見せているが、総評の新しい動きは、これだけにとどまらない。

十四日、社会党江田書記長の「総選挙後の労働運動に対する要請」は、総選挙の結果とともにさらに強化しようとしている。その具体的な展開はまだ始つていないが、諏訪談話に続いて太田、岩井の口から出てくる言葉は明らかに昨年初めに出された「日本労働組合主義」の考え方に立ちもどり、経済闘争一本にしぼつて全労一走る組合をつくりかえていこうとする方向にあることを物語つている。岩井事務局長は春闘において賃上げ、時短等の闘争のため労働戦線統一を全労、中立に申入れることを言明し（全労はこれを拒否するという）ているが、総選挙の結果が明らかになれば全労の切崩しも挫折し戦線統一がやりよくなる、とのの彼の判断は、すでに民同が自分の立場を右寄りに大きく変ている上にそつて見れば正しいといえよう。

今年の二月、国鉄を中心に全労の切崩しが強化し春闘がまつたく骨抜きにされた日本労働組合総評は、国際的に孤立して、総評内部の「自由労連派」といわれる全鉱原、全逓民同の勢力が強まり三池斗争の敗北を前に太田・岩井ラインがこれに代えられることまで噂された。

民同大単産を中心に、次々と総評を切崩し、会社と組んだ華々しい第二組合づくりをやつて来た全労は、各地闘争の敗北と総選挙の中で勢力を確立し、日本労働運動の本流として国際自由労連に一括加盟し、日本労働者を労資協調と反社会主義の強力な鎖でつなぎとめようという方針を今大会で決めた。総評は、「政治斗争反対」をスローガンにする右派による組織の動揺が安保闘争の発展で一応止められたものの情勢が恰えるとともに何ら本質的に組織防衛ができていないことが明らかになるつれ、再び総評自身の変身の仕事をはじめたのだ。三池を絶北させることを手始めに。

（三）

十周年記念の総評大会が、世界労連関係の代表を迎えて華々しく行われた直後、岩井事務局長は中ソ東欧をはじめ世界労連各国と共に自由労連本部や傘下の西欧組合指導部を訪問、自由労連代表団の訪日をとり決めて来た。

国際自由労連は、反共を旗じるしに結成されて以来アメリカ・ヨーロッパの改良主義組合のとりでとなつており、ドル支配に平行してアジア・アラブの労働運動を次々に支配することによつてこれらの国の若々しい労働者階級の動きを資本主義のワク内での運動にとじこめることに成功して来た。そして日本に対する工作も、昭和二十五年の産別崩壊、民同の拡大の時開始されたが、その後はまつたく日本労働運動の主流から見捨てられた形になつていた。それが一昨年動評闘争の中から、当時の組織部長ミラードの来日によつて、組織工作が進められ、労働戦線統一に対するミラード構想として、総評主流を寝返らせたものだつた。（同時に動評闘争をブチこわした宮之原氏が、この夏、自由労連内部で機構改革が行われ、書記長ニールデンブロック、組織部長ミラードは追われ、新らたにイエイヤー会長ベケー書記長が就任したことは前者が同じく反共と改良主義はあつても、経済、権利闘争を「実力闘争」で闘い、植民地の労働運動も経済、権利の分野では世界労連よりむしろ左翼的に指導して来たのに対し、一層反共で労資協調そのままのアメリカ労組系の右からの攻撃の前に敗れたのであり、その結果イエイヤー、ベケーは「骨なし反共」資本主義と共栄する労働運動を確立するため新らたな組織活動にのり出したのである。

来日したこの二人を中心とする自由労連代表は、帰国に際し「総評は失望した、中立主義なとありえない」と言明して帰つたが、安保闘争を斗つた日本労働運動を、いかに総評とはいえアメリカ帝国主義の支配下にあつたこれらの国の労働者と同じにすることは不可能であつた。だが、総評幹部が進んで自由労連の攻撃、左からは多くの下部活動家の「斗え」という要求とそれに応じて日共の進出をして日本経済の発展とともなう労働者の基盤変動、という動きに、最もたくみに自らの地位を確保するために総評民同は国際的な労働運動の動向をやつりつつ動いているのだ。

（四）

安保闘争を労働者の階級的闘いに発展させ、資本家の攻撃をうけて立つ姿勢から、日本の経済発展をみずから担つていく建設的計画を示す積極的な運動に変るべきで「政策転換」を中心にすること、そのためには組合が自分の賃金や労働条件の要求獲得のみでなく国民的福祉に立つた広い運動に発展させねばならない。その運動は全労を合してやつて行きたいというものである。

これはさきに発表された社会党の新政策を労働運動の分野に示したもので、イタリア共産党の構造的改良の思想を採用し、これまでの労働運動に対する裏書！」は、総選挙後の労働運動に対する裏書！」は、総選挙に当り下部組合、地評などでかなり拡がつた「社共両党支持」をかかげる共産党に対する正面からの攻撃であつた。新らしい活動家が、官僚化してどうしようもない民同から離れ共産党にとられていくのを、相変らず「大会決定遵反だ」とおどすやり方は、民同の本性を見せているが、総評の新しい動きは、これだけにとどまらない。

十四日、社会党江田書記長の「総選挙後の労働運動に対する要請」は、総選挙の結果とともにさらに強化しようとしている。その具体的な展開はまだ始つていないが、諏訪談話に続いて太田、岩井の口から出てくる言葉は明らかに昨年初めに出された「日本労働組合主義」の考え方に立ちもどり、経済闘争一本にしぼつて全労一走る組合をつくりかえていこうとする方向にあることを物語つている。岩井事務局長は春闘において賃上げ、時短等の闘争のため労働戦線統一を全労、中立に申入れることを言明し（全労はこれを拒否するという）ているが、総選挙の結果が明らかになれば全労の切崩しも挫折し戦線統一がやりよくなる、とのの彼の判断は、すでに民同が自分の立場を右寄りに大きく変ている上にそつて見れば正しいといえよう。

今年の二月、国鉄を中心に全労の切崩しが強化し春闘がまつたく骨抜きにされた日本労働組合総評は、国際的に孤立して、総評内部の「自由労連派」といわれる全鉱原、全逓民同の勢力が強まり三池斗争の敗北を前に太田・岩井ラインがこれに代えられることまで噂された。

民同大単産を中心に、次々と総評を切崩し、会社と組んだ華々しい第二組合づくりをやつて来た全労は、各地闘争の敗北と総選挙の中で勢力を確立し、日本労働運動の本流として国際自由労連に一括加盟し、日本労働者を労資協調と反社会主義の強力な鎖でつなぎとめようという方針を今大会で決めた。総評は、「政治斗争反対」をスローガンにする右派による組織の動揺が安保闘争の発展で一応止められたものの情勢が恰えるとともに何ら本質的に組織防衛ができていないことが明らかになるつれ、再び総評自身の変身の仕事をはじめたのだ。三池を絶北させることを手始めに。

（三）

十周年記念の総評大会が、世界労連関係の代表を迎えて華々しく行われた直後、岩井事務局長は中ソ東欧をはじめ世界労連各国と共に自由労連本部や傘下の西欧組合指導部を訪問、自由労連代表団の訪日をとり決めて来た。

国際自由労連は、反共を旗じるしに結成されて以来アメリカ・ヨーロッパの改良主義組合のとりでとなつており、ドル支配に平行してアジア・アラブの労働運動を次々に支配することによつてこれらの国の若々しい労働者階級の動きを資本主義のワク内での運動にとじこめることに成功して来た。そして日本に対する工作も、昭和二十五年の産別崩壊、民同の拡大の時開始されたが、その後はまつたく日本労働運動の主流から見捨てられた形になつていた。それが一昨年動評闘争の中から、当時の組織部長ミラードの来日によつて、組織工作が進められ、労働戦線統一に対するミラード構想として、総評主流を寝返らせたものだつた。（同時に動評闘争をブチこわした宮之原氏が、この夏、自由労連内部で機構改革が行われ、書記長ニールデンブロック、組織部長ミラードは追われ、新らたにイエイヤー会長ベケー書記長が就任したことは前者が同じく反共と改良主義はあつても、経済、権利闘争を「実力闘争」で闘い、植民地の労働運動も経済、権利の分野では世界労連よりむしろ左翼的に指導して来たのに対し、一層反共で労資協調そのままのアメリカ労組系の右からの攻撃の前に敗れたのであり、その結果イエイヤー、ベケーは「骨なし反共」資本主義と共栄する労働運動を確立するため新らたな組織活動にのり出したのである。

来日したこの二人を中心とする自由労連代表は、帰国に際し「総評は失望した、中立主義なとありえない」と言明して帰つたが、安保闘争を斗つた日本労働運動を、いかに総評とはいえアメリカ帝国主義の支配下にあつたこれらの国の労働者と同じにすることは不可能であつた。だが、総評幹部が進んで自由労連の攻撃、左からは多くの下部活動家の「斗え」という要求とそれに応じて日共の進出をして日本経済の発展とともなう労働者の基盤変動、という動きに、最もたくみに自らの地位を確保するために総評民同は国際的な労働運動の動向をやつりつつ動いているのだ。

（四）

安保闘争を労働者の階級的闘いに発展させ、資本家の攻撃をうけて立つ姿勢から、日本の経済発展をみずから担つていく建設的計画を示す積極的な運動に変るべきで「政策転換」を中心にすること、そのためには組合が自分の賃金や労働条件の要求獲得のみでなく国民的福祉に立つた広い運動に発展させねばならない。その運動は全労を合してやつて行きたいというものである。

これはさきに発表された社会党の新政策を労働運動の分野に示したもので、イタリア共産党の構造的改良の思想を採用し、これまでの

（以下二面につづく）

病院スト五波にむけ一歩もひくな

「ストてないスト」では勝てない!!

問題は医労連内部にある

十四日、東京医労連傘下第三波闘争は、第三波を上廻る十二組合十八病院の闘争として、東京女子医大始め五病院の全日スト、東邦医大始め十二病院の半日スト、それに慶応病院の職場大会をもつて闘われた。

この第三波を一組合の脱落もなく闘い抜いた医療労働者の前進は十三日全日赤の二九対二の圧倒的多数によるスト・権確立、健保労連のスト権確立、更に全国的な医労労働者の闘争参加しない組合結成をよびおこし、医療、労働者の最大の闘争として発展しようとしている。

安保斗争の過程で生みだされたばかりの、東邦大、女子医大労組によつて準備され、十月中旬から開始されたこの斗争は、医労連中央の賃斗回避の方針と衝突しながらも、極端な低賃金（去る八月人事院が政府に対して給与是正の勧告を行つた資料では、民間産業平均三二、一八八円、公務員平均三二、三九七円に対し、医療労働者の賃金は僅か二四、〇〇〇円という低賃金であり、この中には一カ月四千四百円の給与で働いている看護婦が多数もしくは一日三千円で働いている看護婦、五千円で働いている看護婦にあたる。労働強化を強制されている医療労働者の圧倒的な共感をよび、ほとばしる流れとなつて流れはそうとしているのだ。

すべての勢力が選挙に埋没しているその時に。

政府、資本家は、ことの意外なりゆきに当惑しながらも、闘争ふちわしのために全力をあげている。

厚生省は、当面の対策として①経営合理化の指導、②ストのいる場合の保安要員の確保をあげている。厚生省は、経営合理化の指導を医療合理化計画の実現をめざす、長期構想の一環として打ち出しているわけだが、最賃一万円、一律三千円～六千円の賃上げ要求は、厚生省のこの意図を根底からくずしてしまうものであり、逆に均〇〇円という形で要求を下げることは、みすみすかれらの基本構想の実現を許し、上に厚く下に薄い賃金体系の確立を許すのだ。

医療の公共性をふりかざし、抑圧の意図は、「スト」を骨抜きにし、形骸化しようとする骨抜攻撃だ。

闘争の中心、女子医大、東邦大には、すでに七名に上る逮捕の直接弾圧にのりだし、又、日経連のはりつけオルグがとばされている。

このような中で、女子医大、東邦医大労組は、十四日にも、医労連中央の柔らかいスト（ストでないストの）方針（戦旗三千七百号）に協力する一撮りの独占資本と闘う」ことになるからだ。そのためには「病院スト」をはげしく闘うのはもつてのほかであり、むしろ賃上げから始つた闘争をこの第三波にまでもつてゆくことにあるのだ。

このような激しい内部抗争をへながらも、東邦、女子医大を先頭に、十九日の第四波、二十五日の全日赤をまきこむ第五波、更に十二月二日の傷保労連をまきこむ第六波と闘争は発展しようとしている。しかも十九日以前に職権あつせんがだされようとしているが、その内容が、一定の賃上げ（勿論一律ではない）と引きかえに、スト規制の布石をもつたものになるであろうことは容易に予想される。

当面の鍵は、このごまかしあつせん案を拒否し、実質的なストとして第四波を闘いうることであり、実質的にストを規制する方がなければならない。第四波の質が、予定されている第五波、第六波を決定するであろう。

奔流として流れだしつつある医療従業者の闘争は、資本家や政府の好みにあつた闘い方をもとめるものであり、つまりストライキを自ら否定し病院闘争に支配されない「闘争」を主張し、それにストの名を付けようというわけだ。

政府、資本家としても抵抗の多いスト規制法を強行するよりは、スト規制法を規制する方が、余程楽だし、賃上げあつせんとひきかえに実質的にストを不可能にする条件をおしつけてくる方をこそ第一に選ぶにちがいない。その場合自らの首をしめるようなものではないか。

そして政府資本家が、狂気の如くスト規制法を出してきたその時中心で闘うべき医療労働者は、全く丸裸にされた状態で闘わねばならないではないか。狂心した資本家が、どのような方法でおそいかかつてくるか勿論予断を許さない。しかし何れの場合にも、政府にうちかつ闘争を一歩一歩ふみだしていく方向で闘いぬかなければならないのだ。

船員中央病院、芝浦診療所、それに十四日の第三波に参加した慈恵医大でも全労系の分裂活動が活発化しはじまつている。しかし主要な敵害はこのような全労系の動きそのものの中にはない。むしろ日共系が、組合の統一の名のもとに、結局は、全労系の目論みにのり、闘争を折挫させることにあるのだ。

このような激しい内部抗争をへながらも、東邦、女子医大を先頭に、十九日の第四波、二十五日の全日赤をまきこむ第五波、更に十二月二日の傷保労連をまきこむ第六波と闘争は発展しようとしている。しかも十九日以前に職権あつせんがだされようとしているが、その内容が、一定の賃上げ（勿論一律ではない）と引きかえに、スト規制の布石をもつたものになるであろうことは容易に予想される。

当面の鍵は、このごまかしあつせん案を拒否し、実質的なストとして第四波を闘いうることであり、実質的にストを規制する方がなければならない。第四波の質が、予定されている第五波、第六波を決定するであろう。奔流として流れだしつつある医療従業者の闘争は、資本家や政府の好みにあつた闘い方をもとめるものであり、つまりストライキを自ら否定し病院闘争に支配されない「闘争」を主張し、それにストの名を付けようというわけだ。

政府、資本家としても抵抗の多いスト規制法を強行するよりは、スト規制法を規制する方が、余程楽だし、賃上げあつせんとひきかえに実質的にストを不可能にする条件をおしつけてくる方をこそ第一に選ぶにちがいない。その場合自らの首をしめるようなものではないか。

そして政府資本家が、狂気の如くスト規制法を出してきたその時中心で闘うべき医療労働者は、全く丸裸にされた状態で闘わねばならないではないか。狂心した資本家が、どのような方法でおそいかかつてくるか勿論予断を許さない。しかし何れの場合にも、政府にうちかつ闘争を一歩一歩ふみだしていく方向で闘いぬかなければならないのだ。

船員中央病院、芝浦診療所、それに十四日の第三波に参加した慈恵医大でも全労系の分裂活動が活発化しはじまつている。しかし主要な敵害はこのような全労系の動きそのものの中にはない。むしろ日共系が、組合の統一の名のもとに、結局は、全労系の目論みにのり、闘争を折挫させることにあるのだ。

このような激しい内部抗争をへながらも、東邦、女子医大を先頭に、十九日の第四波、二十五日の全日赤をまきこむ第五波、更に十二月二日の傷保労連をまきこむ第六波と闘争は発展しようとしている。しかも十九日以前に職権あつせんがだされようとしているが、その内容が、一定の賃上げ（勿論一律ではない）と引きかえに、スト規制の布石をもつたものになるであろうことは容易に予想される。

当面の鍵は、このごまかしあつせん案を拒否し、実質的なストとして第四波を闘いうることであり、実質的にストを規制する方がなければならない。第四波の質が、予定されている第五波、第六波を決定するであろう。奔流として流れだしつつある医療従業者の闘争は、資本家や政府の好みにあつた闘い方をもとめるものであり、つまりストライキを自ら否定し病院闘争に支配されない「闘争」を主張し、それにストの名を付けようというわけだ。

政府、資本家としても抵抗の多いスト規制法を強行するよりは、スト規制法を規制する方が、余程楽だし、賃上げあつせんとひきかえに実質的にストを不可能にする条件をおしつけてくる方をこそ第一に選ぶにちがいない。その場合自らの首をしめるようなものではないか。

そして政府資本家が、狂気の如くスト規制法を出してきたその時中心で闘うべき医療労働者は、全く丸裸にされた状態で闘わねばならないではないか。狂心した資本家が、どのような方法でおそいかかつてくるか勿論予断を許さない。しかし何れの場合にも、政府にうちかつ闘争を一歩一歩ふみだしていく方向で闘いぬかなければならないのだ。

船員中央病院、芝浦診療所、それに十四日の第三波に参加した慈恵医大でも全労系の分裂活動が活発化しはじまつている。しかし主要な敵害はこのような全労系の動きそのものの中にはない。むしろ日共系が、組合の統一の名のもとに、結局は、全労系の目論みにのり、闘争を折挫させることにあるのだ。

このような激しい内部抗争をへながらも、東邦、女子医大を先頭に、十九日の第四波、二十五日の全日赤をまきこむ第五波、更に十二月二日の傷保労連をまきこむ第六波と闘争は発展しようとしている。しかも十九日以前に職権あつせんがだされようとしているが、その内容が、一定の賃上げ（勿論一律ではない）と引きかえに、スト規制の布石をもつたものになるであろうことは容易に予想される。

当面の鍵は、このごまかしあつせん案を拒否し、実質的なストとして第四波を闘いうることであり、実質的にストを規制する方がなければならない。第四波の質が、予定されている第五波、第六波を決定するであろう。奔流として流れだしつつある医療従業者の闘争は、資本家や政府の好みにあつた闘い方をもとめるものであり、つまりストライキを自ら否定し病院闘争に支配されない「闘争」を主張し、それにストの名を付けようというわけだ。

政府、資本家としても抵抗の多いスト規制法を強行するよりは、スト規制法を規制する方が、余程楽だし、賃上げあつせんとひきかえに実質的にストを不可能にする条件をおしつけてくる方をこそ第一に選ぶにちがいない。その場合自らの首をしめるようなものではないか。

そして政府資本家が、狂気の如くスト規制法を出してきたその時中心で闘うべき医療労働者は、全く丸裸にされた状態で闘わねばならないではないか。狂心した資本家が、どのような方法でおそいかかつてくるか勿論予断を許さない。しかし何れの場合にも、政府にうちかつ闘争を一歩一歩ふみだしていく方向で闘いぬかなければならないのだ。

船員中央病院、芝浦診療所、それに十四日の第三波に参加した慈恵医大でも全労系の分裂活動が活発化しはじまつている。しかし主要な敵害はこのような全労系の動きそのものの中にはない。むしろ日共系が、組合の統一の名のもとに、結局は、全労系の目論みにのり、闘争を折挫させることにあるのだ。

付録87

前衛党論覚え書

革命的プロレタリアートについて

青山　刮

（一）

われわれが戦旗派結成宣言を発してから一ケ月余を経過した。宣言において、われわれは、

「……社会民主主義、スターリニスト共産党の否定の上に自らを体現してあらわれた我が同盟は、この闘い（安保闘争）に全力を投入し、自らを真の前衛党に鍛え上げる課題に直面した故に、ほかのいかなる諸勢力にも増して、我々自身の欠陥の仮借なき発明の道にわれわれをかかたたのである」「われわれのつき当ったものは革命の客観的諸条件と主観的諸条件の機械的分離。それにもとづく主観主義、小ブル急進主義、大衆運動への理没、理論におけるスターリニズムへの傾斜等だった。これが同盟の革命的再生の課題の前にたたされたわれわれの出発点であった」ことを明らかにした。

この宣言が充分明瞭されておらず、多くの不充分さをもっていたとはいえ、課題は明確に把握されていた。

プロレタリア党建設とそのための自らの革命的変革。

だが、宣言によってわれわれが獲得したものは、ほんの出発点にすぎなかった。

過去において、スターリニスト党からの　組織的分離を理論的分離の出発点と明確に自覚しえずその努力を怠ったが故に同盟は自己破産した。

われわれが現在、革通派やプロ通派あるいは若干類似した諸君と異っているのは、旧同盟の欠陥を自らのうちにおいて克服しなければならないということを自覚した点において差がある。

それ故、われわれのこの間の闘争が、当然にも、革通派・プロ通派との分派闘争として現象したとしても、それは　戦旗派の戦旗派自らに対する斗い　でなければならない。

われわれの自らに対する格闘なしには、われわれはプロレタリア党建設（ヘプロレタリアートの階級への形成）の課題を遂げえないだけでなく、再び旧同盟的泥沼に陥入ってしまうであろう。

（二）

われわれが、プロレタリア党建設とそのための自らの理論ー実践的課題を自らに課したとき、ある人々は、それは当り前のことであり、同盟は、いかなる大衆闘争の方針を提起するかだという。

また、プロ通派の諸君は、われわれがプロレタリア党組織建設を自己目的化しており、前党を神格化するところの「組織論におけるスターリニズム」に導されているあらゆる闘争を革命の展望（？）の下に闘うことによってのみ前衛党は建設されるのだといってわれわれを非難した。

そうだ。プロレタリア党なしにプロレタリアートの勝利はないということは全く当り前のことだ。そしてプロレタリア党は現実の階級闘争からはなれては建設されないことは極く当り前のことに違いない。

だが、この当り前のことを知って闘ってきたにもかかわらず、同盟は見事に階級闘争ー安保闘争の中で破産した。

いや、それどころか、スターリニスト党も、このことを当り前のこととして、プロレタリアートを裏切っているのではないか。

とすれば、この当り前のことを知っているだけでは何の解決にもならないことは明らかだ。

このことが概念的ー実践的に把握されなければならないのではないか。

いや違う。われわれが破産したのは国家独占資本主義の正しい把握がなかったからだと無かがいらたしかに現代資本主義の分析は決定的に重要だ。だが、何のためにブルジョアジーにとっては、自己の富の蓄積の現実的形態として、プロレタリアートにとっては、自己の否定現実として、それ故に自己恢復のために爆砕しなければならない対象として、現代資本主義社会はあるのだ。

いや、科学的な、認識による客観的真理として……と。

だが利害の相対立するブルジョアジーとプロレタリアートの階級的実践過程ー結果として現代資本主義はあるのだ。このいずれの階級的立場ともかかわりのない客観的な資本主義論があるだろうか。

認識（科学）の対象としての資本主義　を「ただ客体または直観の形式のもとでだけとらえ感性的な人間活動、実践としてとらえず、主体的にとらえない客観主義者」のみがこのような国家独占資本主義論（プロレタリアートの実践とはかかわりのない）を主張しうるのだ。

まさに、このような客観主義的理論、認識にもとづく主観主義的実践の結果、同盟の破産があったのではないか。

このような資本主義を客観主義的に把握しうるブルジョアジーでもプロレタリアートでもない立場を現実的に強いて求めるとすればプチブル以外にはないではないか。このような実践主体（プロレタリアート）とかかわりのない客体化された「理論」でいかに「武装」しようとも自己変革なとありうるはずもないし、したがってプロレタリア革命もありえようはずもないのである。この点では、同志坂田と一致する。

すると次の論点はいう。いや同盟は階級関係の認識が欠如していたからだと。

勿論階級関係の把握とは明確な方針がありえようもないし、それなしに斗ったのでは、自らが傷つくのみであり、まったく偶然にルンペットの如く、急所に当ることがあるかも知れないだけかも知れない。

だが、問題は、ここでも、誰がいかにしてということだ。

客観主義的に階級関係を把握することにより「外から」プロレタリアートに「号令」をかけても、プロレタリアートの階級への形成は問題にはなり得ない。

実践ー理論に階級関係を把握するということは、「敵をしりぬき己をしる」ことだ。

己をしるとは当然プロレタリアートそれ自身でなければならないしかもブルジョアジーの支配の顚覆と政治権力の奪取を目常的に把握した階級としてプロレタリアートのみが、自己を知ることができるのだ。

（三）

そこで、プロレタリア革命はプロレタリアートがやるのだからプロレタリアートの中に入ってゆかなければならない。いままでは、学生運動にばかり目を向けていたから失敗したのだと。

そうだ。全く賛成だ。

だが、ちょっと待て。

今までわれわれは、その面に同盟全体の主要な努力を注がなかった（このことが、その裏成実体はどうであれ、同盟の決定的弱点であったのだが）からといってプロレタリアートの中で全く活動しなかったわけではない。

そのときわれわれは「直観的にとらえた実践的課題」を鮮明にかかげておしすすめ」ようとしなかっただろうか。

問題は、この直観、あるいは、この直観的に把握された実践的課題を概念的に明確にすることにあったのだ。

この直観的に把握された実践的課題が、プロレタリア党の建設なのである。

（四）

「プロレタリアートの解放はプロレタリアート自らの行為」であるにもかかわらず、「外から」絶えず革命的意識を注入するところのプロレタリア党が存在しなければプロレタリアート自らの解放はないのか。

このことを目常的ー概念的に把握することなしにはプロレタリア党なしにはプロレタリアートの勝利はない」という当り前のことを知りつつ、大衆闘争の中に埋没してしまい、世界プロレタリア革命その一環としての日本プロレタリア革命の勝利の達成へと向うプロレタリア党建設のための活動と化して自己破産せざるを得ない。

「戦旗」（二六号）の小論の中で自己に課した課題「階級闘争とプロレタリア党の論理の追求」を行うことが目的であったのだが、何らの変化も起りえない。

まさに「その注入の性格を規定」するの大きく斗争の性格を規定」するのだ。

もし、われわれが「階級斗争の現実的課題を遂行することによって獲得される直観的認識と理論」の生きた交流」にのみによって斗争を進めるとしたら経験主義ー主観主義に陥ってしまうだろう。

（一切の生活手段を喪失した）プロレタリアートは「労働力」を見出だすあいだだけ生き、かれらの労働が資本を増殖するあいだだけ労働を見出だす」存在として直感的に対立している。プロレタリアートは、まさに彼らが絶対的窮乏ー否定された存在であると同時に「人間生活の永遠的な自然的条件」としての物質的労働の主体であるが故に、自らをしばる鉄鎖をうち砕き自己恢復する現実的運動を貫徹する主体であるが故に革命的階級なのである。

だが、同時に彼は、ブルジョアジーの相互依存の中に生きている。それ故に日々彼らが労働市場でうる感性的直観（合然発生性）は自己の歴史的地位を自覚的に把握していない。だから彼らの自発的闘争ー現実的階級闘争は目的意識的な革命的闘争ではない。あるいは、戦後の民衆運動をクフト・ハートレー法などによって弾圧されていた米労働者の闘争はこれで終るものではない。

闘争の生々しい状況を示すアメリカ国政府にはストライキを取扱うための介入はやらぬ方がいい、とほのめかしている。GEスポークスマンは「われわれは国家経済に恐慌をおこすことなしに一年間くらいはやって行ける」という。

政府は国家的な産業紛争に関するタフト、ハートレー法の適用によってしかエ場再開をなしえないのである。GEは、タ、ハ法成立ならやるのだが、これは組合に組合に満足なだけ打撃を与えることはできないとしている。GE。会社の考えは、組合を全つぶしてしまうことにある。

更にGEは、全米の労働運動に対し威口を開いているのか。いみじくもGEのCEウイルソンは十年前に語った「われわれは、全私企業の通路と性格を左右する力を手中にしている」と。

（一面よりつづく）

ストライキにたいする見通しにおきえ、三泊闘争を交渉通り売り渡し、日本資民同が、自ら資本家の手先となって組織を分裂させ、闘争をつぶすためにのみ働いて来た歴史と手を組んで日本労働運動全体を資本主義のワクの中におしこめ資本主義の発展を前提としてその中で利益を増す方向に持って行こうとしていることは、この中からも明らかである。年末斗争が全ー斗争になっていないのと同様に原因は資本家の「好景気の現在波乱をおこしたくない」との考えを見込んで、完全な、ベツク闘争として終らされる方向にある。資本家側はしかしその中で、職制支配の体制を一層確立し、賃金体系を変え、労働者の団結をくだくことをもくろんでいるのだ。

踏襲は、これに抵抗するのでなく逆に資本の攻撃を正当なものだと思いこませるものである。

日は付、これを、もつぱらアメリカ帝国主義との闘いを放棄した、という点で攻撃している。だが労働者にとって自分らの利益を保障するただ一つの道である階級としての団結、資本との闘争が根本から奪られている時、こうした批判は問題の本質を忘れさせるだけである。労働者のこうした動きは自分達の利益に一切無益であることをはつきりさせ、これに代って真に階級闘いを進め得る力を、職場の中につくり上げることである。それは、全然別の所で反米闘争を発展するのではなく、職場で資本の攻撃をはねのける闘いを総評のお偉方がどういおうとも進めて行くことである。

踏襲がかくも憶病ならば、組合自身は背水の陣をしいたことになる。

GEが、公然と激励した大量馘労に際し労働者は多くの地域で自分の体をバリケードとし、スクラムを組んで、スト破りを押しかえし、警官や消防ポールとも斗った。シラキュースでは、労働者は工場に通ずる道を自分の自動車でふさぐ。これは四一年のフォード工場の大ストライキ以来の壮大な戦術である。

われらの感激的な戦斗精神は今のところ労働者的な政府の手をおさえつけている。

全米労働者の運命がまさにこのストライキにたえ現実求されているしかも、今だからこそ必要なのだ。

GEがかくも憶病ならば、労働者は背水の陣をしいたことになる。

GEが、公然と激励した大量馘労に際し労働者は多くの地域で自分の体をバリケードとし、スクラムを組んで、スト破りを押しかえし、警官や消防ポールとも斗った。シラキュースでは、労働者は工場に通ずる道を自分の自動車でふさぐ。これは四一年のフォード工場の大ストライキ以来の壮大な戦術である。

われらの感激的な戦斗精神は今のところ労働者的な政府の手をおさえつけている。

全米労働者の運命がまさにこのストライキにたえ現実求されているしかも、今だからこそ必要なのだ。

組合つぶしと斗う米労働者

ジエネラルエレクトリック二十二日の斗い

アメリカ電機産業を支配するジエネラル・エレクトリック社（GE）の労働者が十月一日ストライキに立ち上った。全米一六六の工場二四万の労働者中、七万を組織する国際電気労組IUEは協約更新期に際して平均時給二ドル三〇ー四〇セントをいまニ、五％引上げ、明年十月にもまた二、五％引上げ、ほかに生計費スライド賃金を含めた二年間の協約及び工場閉鎖による余剰人員の他工場への優先採用を要求した。

これに対し会社側は「三年間の協約、賃上げは現在三％、再来年四月から四％とする。生計費スライド制は取止める、不要人員は新職務に向くと考えられる者だけ再訓練する」という回答を行った。

IUEは、共にGE十一万の労働者を組織する米自動車労組と国際機械工労組はこれに屈服したが、IUEは指導してストライキに入った。戦後ストック、アウトに対して闘い賃上げをかちとって以後、会社の巧妙な労務管理によって十五年間一度もストに立ち上ることのできなかつたIUE労働者の怒りが爆発したのだ。これを「経営哲学への挑戦」と改撃している。

闘争は、公然たるスト破り、警官の出動の中で三週間にわたって闘われたが、主力工場スケネクタディ等のくずれのため十月二十二日遂に会社側回答を受諾した。しかし、戦後の民衆運動をタフト・ハートレー法などによって弾圧されていた米労働者の闘争はこれで終るものではない。

闘争の生々しい状況を示すアメリカ政府にはストライキを取扱うための介入はやらぬ方がいい、とほのめかしている。GEスポークスマンは「われわれは国家経済に恐慌をおこすことなしに一年間くらいはやって行ける」という。

政府は国家的な産業紛争に関するタフト、ハートレー法の適用によってしかエ場再開をなしえないのである。GEは、タ、ハ法成立ならやるのだが、これは組合に組合に満足なだけ打撃を与えることはできないとしている。GE。会社の考えは、組合を全つぶしてしまうことにある。

更にGEは、全米の労働運動に対し威口を開いているのか。いみじくもGEのCEウイルソンは十年前に語った「われわれは、全私企業の通路と性格を左右する力を手中にしている」と。

（一面よりつづく）

ストライキにたいする見通しにおきえ、三泊闘争を交渉通り売り渡し、日本資民同が、自ら資本家の手先となって組織を分裂させ、闘争をつぶすためにのみ働いて来た歴史と手を組んで日本労働運動全体を資本主義のワクの中におしこめ資本主義の発展を前提としてその中で利益を増す方向に持って行こうとしていることは、この中からも明らかである。年末斗争が全ー斗争になっていないのと同様に原因は資本家の「好景気の現在波乱をおこしたくない」との考えを見込んで、完全な、ベツク闘争として終らされる方向にある。資本家側はしかしその中で、職制支配の体制を一層確立し、賃金体系を変え、労働者の団結をくだくことをもくろんでいるのだ。

・ウールド」（十月十四日付）は左のように伝えている。

× × ×

ジエネラル・エレクトリック労働者、二十年来機械工の組合つぶしに対して立ち上る。

J・Pモルガンの支配するGEは、自らの会社の労働者及び合衆国の全労働運動に対し全力をあげて闘いを挑むのは第二次大戦以来はじめてのことである。

数週にわたる交渉において、会社は、次期契約における生活費条項の更新を拒否して来た。

JBカレー（国際電機労連の組合長）は、会社に対しこの点について譲歩を勧告した。「われわれはストをやろうとは思わないのに、あなた達はわれわれにストをおしつけるのか」と。

しかし、会社はよく知りぬいていた。GEのハードボイルド的な態度は、単にストを押しつけるのではなくて、押しつけ、そしてぶつつぶす、という計画だったのだ。

マサチューセッツ、コネチカット、ニュージャージー、ニューヨークにおいて、ストの第一日目からたちまち会社のしかけた暴力が爆発した。GEは、もし地方警察及全国家警察の充分な「保護」がえられない場合は、工場を移転せざるをえないであろう、と通告を発した。

このように労働者の離庄を地方政府に要請する一方、会社は合衆国政府にはストライキを取扱う

革命論争資料集

::::::戦旗編集局編::::::

内容

戦旗派結成の基本的立脚点

同盟活動の総括に代えて戦旗編集局

大衆斗争によって党を

創る路線批判

命木　武

好評!!　発売中

東大駒見書、青山訳文、田川、山崎論文、革命の通達、プロ通各号

南部地区決議草案など収録

B五版定価百円　〒八円

申込は前金にて　発行戦旗経営局

付録88